

教員養成学部における「教職パフォーマンス」の 育成に関する一考察

- 「教育実地研究Ⅲ」「教職セミナー」の実践を通して -

A Study on the Method of raising the Performance Skill of the Student who wants to be a Teacher

川 路 澄 人

Sumito KAWAJI

廣 兼 志 保

Shiho HIROKANE

高 旗 浩 志

Hiroshi TAKAHATA

島根大学教育学部附属教育臨床総合研究センター紀要第3号

平成16年3月

教員養成学部における「教職パフォーマンス」の 育成に関する一考察

- 「教育実地研究Ⅲ」教職セミナー」の実践を通して -

A Study on the Method of raising the Performance Skill of the Student who wants to be a Teacher

川 路 澄 人* 廣 兼 志 保**

Sumito KAWAJI Shiho HIROKANE

高 旗 浩 志***

Hiroshi TAKAHATA

要 旨

本研究は、教育に関する正確な知識、論理的な判断力、そしてそれらを相手に伝えるプレゼンテーション・スキルを包括するキーワード「教職パフォーマンス」の育成・伸長について実践的にアプローチした「教育実地研究Ⅲ」教職セミナー」を記録・検証したものである。

[キーワード] 教員養成、教職パフォーマンス、コミュニケーション能力、
教員採用試験

はじめに

教員養成学部として山陰を中心とする中国地方の教員養成を担うこととなった島根大学教育学部（以下、本学部）では今後、教員養成という目的をより一層明確に持ったカリキュラムとそこでの学生教育、研究活動を行わなければならないことは自明なことである。しかしながら教員養成を担うということは、教員免許状を発行するために必要な講義・実習を実施すれば良いとか、教育に関する、あるいはその内容学に関する研究を行えば良いというものではない。現実的な言い方をすれば、本学部の卒業生の多くが教壇に立ち正式な教諭として学校に勤務すること、これが教員養成学部として、我々が目指す目的の一つとあって良いであろう。しかし、我々はこの目的を達成するために、現状を正確に判断する情報を持たない。学生が教員として採用されていく過程に横たわる様々な問題、教員採用の動向や教員採用試験の傾向に対

* 附属教育臨床総合研究センター共同研究員

** 附属教育臨床総合研究センター

*** 附属教育臨床総合研究センター

して門外漢に近い我々が第一にしなければならないことは、これらの現状把握とそれに基づいた今後の傾向と対策を判断すること、そしてそれを学生指導に反映させることである。

本研究はこうした問題意識をもとに筆者（川路・高旗）が協同で行った「教育実地研究Ⅲ」の講義運営と、附属教育臨床総合研究センター企画（廣兼・川路）の「教職セミナー」の実施内容を踏まえ、諸問題に対する検討とその成果について検証するものである。

I 教員採用に関する動向

1 教員採用動向の変化

教員採用について検討する場合、全国的な動向と本学部の所在地である島根県のそれを比較する必要がある。

筆者（川路）は既に「学部教育と教員供給の関わりについての一考察 - 島根大学教育学部美術教育研究室の学生動向をもとに -」（2001年）において筆者が所属していた美術教育研究室の卒業生の島根県を中心とする動向を調査・研究したものがあつた。この当時の結論として本学部卒業生の教員採用状況は厳しいものであることと、中学校の美術科という教科に限定した調査であつたが「複数免許」神話¹⁾は確固たる証拠があつてのものではなく、調査結果からその因果関係を見出すことができなかつたこと、逆に平成3年度から11年度においては高い専門性をもった受験生（美大や特設教科美術専攻を持つ教育学部の卒業生）が合格しており、結局は受験教科の教員採用試験における得点の高さが重要であつたことなどが導き出された。²⁾

しかしながら、近年教員採用に関する動向が多少ではあるが変化が生じている。全国レベルで採用者数が増加する傾向にある。教員採用に詳しい広島大学の山崎博敏によると「21世紀に入るやいなや、全国の教員採用者数は急激に増大し始めた。神奈川や東京で始まつた小学校教員の採用者数の増加は、首都圏と関西圏の一円に波及し、さらに太平洋ベルト地帯にも広がつてきた。大都市地域では中学校の採用者数も増加に転じている」³⁾のである。

<表1>に見られるように2000年度を底として、教員採用者は小学校を中心に増加に転じている。山崎はその理由を以下のように述べている。

「その理由は比較的単純である。第一に、1990年代半ば以降、出生数の減少に歯止めがかかり、近年は小学校児童数だけでなく中学校の生徒数にも歯止めがかつている。第二に、小学校では大都市圏を皮切りに、退職者の大部分を占める定年退職者が増加し始まつている。小・中学校とも、2008年春以後には急増する見込みである。第三に、01年度から『第7次公立義務教育諸学校教職員定数改善計画』により、基本3教科での『20人学習』が実施されているからである。』⁴⁾

山崎の分析以外にも大都市圏の50代教員が昨今の教育改革や教育が抱える現代的な問題に疲れて、早期退職するという話も聞こえてくる。<表3>によると本年度の小学校に限つて言うならば、東京都902名、埼玉県・さいたま市720名、千葉県・千葉市513名、神奈川県554名、横浜市604名、関東一円の単純合計で3293名の小学校教員が採用されている。<表4>によると関東圏に所在する初等教員養成課程を持つ国立大学として東京学芸大学が178名、埼玉大学71名、千葉大学82名、横浜国立大学53名、群馬大学26名、茨城大学16名、合計426名の正式合格者を出している。上記6大学の学生が全て関東圏に就職したわけでもなく、また初等教員養成

を行う私立大学、短期大学の存在を考慮したとしても、単純計算で13%の供給率という状況は、大都市圏の教員養成系学部の現役卒業生のみでこれらの需要に対する供給を行うことは難しいと考えることが妥当であろう。教員養成系学部の教員養成課程は「5000人削減」という目標を新課程への定員委譲という形で果たしたが、地方大学は<表2>に見られるように少なくなった学生（供給）を多くの教員採用（需要）のある都道府県へ輸出することによって教員就職率を上げていると予想される。また教員就職率が高まるにつれて、臨時教員としての採用の割合も増加している。つまり「教員になりたいならば、大都市圏を受験し、それでも駄目だったら臨時教員として経験を積んで受験しつづけるならば、合格しやすい」と学生への就職指導することが現状での最善策とも言える。実際に地方都市にある本学部は島根県出身者がほぼ半数を占めており、「地元を離れて都会へ」という指導はなかなか困難である。学生は「何年講師を続けても、地元で教師になりたい」という思いが強く、彼ら・彼女らに学費を支出（投資）する保護者は一層強くそれを望んでいる。かつては「地元教員志向が強いからこそ、地元の大学へ」という発想もあったが、実際には島根県教員における本学部卒業生のシェアはおよそ3割でしかない。近年の教員採用状況においても他の都道府県からの「Uターン」組が多い状況の中、「教師になりたいければ、より学力に応じた偏差値の高い大学、学部へ」という高校での進路指導もあると聞いている。また「大学で地元から離れられない学生は、就職においても県外へ出る可能性は低い」傾向が強いために、本学部の卒業生は島根県の臨時教員の人材バンクと化している。

2 島根県の教員採用状況

このような状況下において、今年度の島根県教員採用候補者選考試験（以下、教員採用試験）は<表5>のような結果であった。この表に見られるようにほとんどの校種・教科が10倍を超える超難関となっている。中学・高校の半数の教科が採用者数1名であり、受験者数イコール倍率となっている。逆に中学・高校で数学と英語の合格者数が突出して多い理由として両教科の少人数指導を実施することが挙げられる。採用者の多くは講師経験者であり、新卒（現役）からの合格者はごくわずかである。ちなみに本年度の本学部4年生では小学校2名、中学数学1名が現役合格であった。そのような中でも小学校での多少の採用者増（25→30）と倍率の低下（15.6→13.9）が見られる。島根県では小学校1年生での30人学級を実施し、教員配置増がスクールサポーターを選択することになったため一時的に増加したと思われる。しかしながら島根県内では多くの小中学校の合併が相次ぎ、小規模・僻地校の閉校などが進んでいる。今後この動きが加速するにしたがって、高齢化の激しい島根県では教員の大幅な増員は見込まれない。現在の教育現場には多くの講師が存在する。大学卒業直後の新米講師や毎年学校を転々とし続けるベテラン講師、30歳代になり受験資格（34歳以下）に危機感を感じながら、また結婚し家族を養いながら不安定な講師という職で食いつなぎ教員採用試験を受けつづけている者も多い。こうした状況下では、講師を3～5年程度勤めた後、教職をあきらめ他へ転職する例も少なくない。

以上のような教員採用の動向から考え、本学部の学生教育（教員養成）の在り方として、より優秀な人材を具体的なスキルの獲得という形で教育するとともに、就職指導として島根県と

他の都道府県の教員採用試験の複数受験を推奨し、たとえ不合格であってもアフターケアとしての研修と講師への斡旋を進めていくしかないと考える。

Ⅱ 教員採用試験に関する傾向

1 教員採用試験の概要

教員採用試験とはいったいどのような能力を検査し、合否を判断するのであるかという疑問は常につきまとう。しかしながら教員採用試験の内容を検討せずにおいてそこで判断される基準を問うことは無益である。近年の教員採用試験の動向を大まかにでも見ることによってそこから見出される価値基準とそれへの対策も必然的に見出されるのではなからうかと考える。

近年の教員採用試験は一次試験における学力試験とそこで選抜された受験生に対する面接を中心とした二次試験が存在する。

多くの都道府県で一次試験では学力を問う筆記試験を実施している。試験科目としては「一般教養」、「教職教養」、「教科専門科目（小学校では「小学校全科」）などが記述式、あるいは大都市圏ではマークシート方式で行われる。「一般教養」としては人文分野、社会分野、自然（数学、理科）分野、時事問題、地域のニュースが幅広く出題され、「教職教養」は教育原理、教育心理、教育法規、教育史、教育時事などが問われる。出題の傾向には各都道府県において特徴があり、過去の問題からその傾向が伺える。最近の「教職教養」では審議会（中央教育審議会、教育課程審議会）の答申や文部科学省から発表された文書からの出題や、同和・人権問題に関する出題が増えている。一次試験は受験者の基礎学力を量るものであり、一般的にこの時点で受験者を採用者数の2～3倍の人数まで絞り込む。学力面を問う一次試験を突破した受験生には、面接を中心とした人間性を問うような二次試験が待ち受けている。人間性重視の背景には近年さわがれている教職員による犯罪、事件、そして社会性の無さが指摘され続けているからであろう。最近では研修に加え、社会体験（新聞記者の入門体験、デパートなどのサービス業における接客研修等）といった対策が行われている。にもかかわらず教職に就く者のモラルが問われている。⁵⁾ 教科における専門的知識と教育に対する熱意や姿勢の両方が必要な教職において、教員採用試験における演技力と講師経験によって合格する場合もありえるのである。一次試験はあくまで個人の日常の学習の成果といえるが、二次試験は受験者のパーソナリティとパフォーマンス能力が判断されていると言っても良いであろう。しかしながらそれらが人間性を意味するものであるかは疑問である。

また、教員採用試験は日本列島の北から始まり、幾つかのブロックに分かれて実施されるので、一次試験を併願し幾つもの合格通知をもらう受験生が出てくる。これについては一般企業の就職活動と同様で、優秀な受験生は幾つもの採用通知をもらい、試験勉強に不熱心であった者はどの試験でも一次試験で不合格を通知されることが多い。近年関東、関西圏で多くの講師採用があるのは両方の採用通知を受け取る受験生の移動によってこうした事態が生じていると予想される。

2 島根県における教員採用試験

島根県に限って言うならば、今年度の教員採用試験について<表5>に示す倍率は全体のものであったが、一次試験後の二次試験のみの倍率はどの校種・教科においても約3倍であった。小学校では30名の名簿搭載者に対し、一次試験合格者は約90名であった。例年では約2倍であったことから考えると、今年から学力での審査基準を緩め、反対により多くの人材の中から適切な人選をしたいという二次試験の重視が伺える。

一次試験の内容としては「教職教養・一般教養(80分)」、「小学校全科(60分)又は「教科専門(90分)であった。「教職教養・一般教養」は記述式が中心であるが、時間的にも余裕を感じられる程度の出題数(45問程度)であった。「小学校全科」又は「教科専門」については出題数が多く、しかも記述式のみ出題である。受験生からの情報によると「 な教材を児童(生徒)に指導する際に留意する点を3つ挙げ、それぞれについて説明せよ」 年生の科の年間指導計画を立てる上で、留意する点を記述しなさい」といった具体的な出題がされるらしい。学習指導要領や、教員採用試験参考書に記載されている回答例を暗記しても対応できない出題傾向である。また出題数も極端に多く、受験生が解答できないまま白紙で提出する問題も多くあると聞いている。

二次試験の内容としては「小論文(60分)」、「適性検査(15分)」、「水泳実技」、「個人面接Ⅰ(30分)」、「個人面接Ⅱ(15分)」、「集団面接(60分)」、「模擬授業(20分)であった。

「小論文」は「丸と四角」というテーマで自分の考えを600~800字程度にまとめるものであった。例年抽象題がだされ、過去には「森と魚」や「捨てる」が出題されている。「水泳実技」は25メートルプールを中央まで歩き、残りを平泳ぎ、ターンしてクロールで25メートルを泳ぐものである。これらは例年通りであり、特に変化はなかった。

毎年大きく変化するのが、面接関係である。以下に今年度の4つの面接・模擬授業の概要を複数の受験生からの情報をもとに紹介する。

(1) 個人面接Ⅰ

「個人面接Ⅰ」では、面接官3名から受験生が事前に提出した調査表についての質問とその他に次のような質問がなされた。

「採用試験に向けてどんなことを行ったか？」

「教育実習について」

「教員に向いているところは？」

「大学でのサークル活動は？」

「ストレス解消の方法は？」

「友人と意見が対立した時、どうしますか？」

「子どもと接して一番嬉しい時、悲しい時は？」

「授業以外で子どもにどのような指導をしますか？」

およそ20問程度の質疑応答がなされる。

(2) 個人面接Ⅱ

「個人面接Ⅱ」では、面接官は2名、15分間をタイマーで計りながらの面接であった。質問内容は以下のとおり。

- 「簡潔に自己アピールを」
- 「取得免許について」
- 「二次試験対策（面接）について」
- 「教育実習での様子について」
- 「（調査書に記載した）特技・趣味について」
- 「受験校種・教科について」

短い時間であるが、面接官も相づちを打ってくれたりする為か受験生からは話しやすい雰囲気であったと聞いている。

（3）集団面接」

今年度はこれまでの集団活動（集団討論形式）から、共同・協同作業を行うものに変更となった。受験生を5～7名程度のチーム編成し、次のような資料をもとに協議・発表をさせるものである。

「地域住民の一員として、環境問題に取り組むボランティア活動グループをつくって活動しようと思います。活動内容等を想定して、地域の住民に対して、グループへの参加の呼びかけを行ってください。」

「島根県に新しい高等学校を作ろうと思います。どのような高等学校が望ましいかチームで話し合い、プレゼンテーションしてください。」

「学校に新しい相談窓口を設けることとしました。気軽に相談できるような窓口を全校朝会で説明してください。」

45分間で協議、時間内に役割分担をしながらプレゼンテーション資料の作成の後、3分間で発表を行うものである。模造紙、画用紙、マジックペン、鉛筆、のり、はさみ等が準備されている。時間が短く、時計を見ながらの協議と役割分担による資料作成が重要である。チームの構成員が相互に協力しながら円滑に話し合いを進め、結論を要領よく相手に伝えることが求められている。

なお、昨年までは5～7名程度の同一校種、あるいは同一教科（二次試験合格者の少ない教科では複数の教科）の受験生を1チームとし、テーマ（記事やデータ）を与えられ、90分間それについて討論する課題であった。教育現場における職員会議を前提とした能力を判断するという噂もあったが、司会を置かず、自分たちで議論の焦点と具体例を交えながら論議をまとめていく過程はかなり高度な自己表現能力とコミュニケーション能力が問われることは明らかである。これまではこの集団による討論活動が合否に大きく関わると噂されていたが、その理由として合格者が複数でているチームと全くいないチームが存在するという合格者からの情報が挙げられる。

（4）模擬授業」

例年とほぼ変わらない出題で、8分間以内に一次試験合格通知とともに郵送された書類に記載された下記の3つのテーマで模擬授業を行う。

- ①学級の児童（生徒）を前にして、学級活動（L H R）の時間に、あなたの学級経営方針を話してください。
- ②職員会議で校長から、「 について学級で指導してください。」と指示がありました。

学級の全員に指導してください。 については、「家庭学習の必要性」、「命の大切さ」のうち1つを当日指定します。なお特殊教育諸学校受験者は、児童（生徒）の発達段階を考慮して指導を行うこと。

- ③ 担当する学級で、あなたの受験教科の授業を行ってください。 小学校受験者は希望する教科の指導でよい。 特殊教育諸学校受験者は、領域・教科を合わせた指導等でもよい。

注意事項としてテーマの指示は当日行い、学年場面設定は各自に任されており、板書を必ず取り入れなければならないが、メモや教材、教具の使用は不可である。

面接官2名にテーマを出題され、学年、学期、クラスの数等を伝えた後、8分間の模擬授業を行う。その後、着席し模擬授業の内容について面接が行われる。

「模擬授業を自己評価すると何点ですか？」

「この後、どのように授業を進める予定ですか？」

「なぜこの学年で行おうと考えましたか？」

「板書の工夫は？」

「身振り、手振りの意味は？」

以上のような二次試験重視の傾向の中、筆者らは学部教育におけるこれらのコミュニケーション・プレゼンテーション能力を育成するプログラムの不在に危機感を感じていた。そこでこのコミュニケーション・プレゼンテーション能力を教師の職能としての「教職パフォーマンス」と考え、その実験的講義「教育実地研究Ⅲ」を2002年度より企画・運営してきた。次章においてはその講義の内容と2年間講義に使用したワークシートについて解説する。

Ⅲ 「教育実地研究Ⅲ」について

1 「教育実地研究Ⅲ」の企画と実際

既述したように教員採用二次試験におけるプレゼンテーション能力はその合否に大きく影響するであろうことは容易に推測される。それを受験生も大学教官も自覚しているからこそ、「教員採用試験は講師経験者が有利」という噂がまことしやかに聞こえてきたり、「現役では合格しないから来年講師を経験してから本気で受験しよう」という学生の諦めにも似た声を聞くことが多い。しかしながらそのプレゼンテーション能力（後述する「教職パフォーマンス」）がどのようなものであるのか、どのようにすれば育成されるのかについて興味は低く、その対策は疎かになっていた。「教育実地研究Ⅲ」は「知的な理解よりも実際にできること」を講義の目標とし、実践の中でしか培えないのであれば、徹底的に実践・実戦していくことを繰り返す講義であった。その講義内容は<表6>の通りである。

本学部の学生は教育臨床系科目として2年次に「教育実地研究Ⅰ」、3年次に「教育実地研究Ⅱ」を履修し、実際に児童生徒と触れ合う機会を設け、その授業実践に対する事前・事後の指導を行っている。また教科教育系の科目では「～科教育臨床」「～科教育法演習」において授業検討、教材研究、模擬授業などを行った後、3年次後期に教育実習（教壇実習）を行う。しかしながらこれらの講義を履修し、かつ5週間の教育実習を経た学生が履修する「教育実地研究Ⅲ」の最初の段階では未だ自己表現のパフォーマンス能力が低い学生が多く見受けられる。具

体的に1分程度の自己紹介，自己アピールをさせた際の彼ら・彼女らの特徴は以下のとおりである。

- ①最初に「島根大学教育学部，～研究室4年（中には学生番号），（氏名）です。」と必ず話す。場や状況を判断することなく定型句でしか話せない。
- ②教員志望の理由を話す際に「小学校 年生の時の先生がとても良い先生で・・・」教育実習で生徒と触れ合う中で・・・と漠然としたことを並べ，具体的な事例を交えて話すことができない。
- ③個人的な趣味や好きなものを並べることはできるが，それが自己紹介の中で関連付けることができない。
- ④自分の長所や短所を客観的に述べることができない。
- ⑤事前に5分間の構想を練る時間を与えていても，1分間にまとめるということができない。
- ⑥話し始めると「～で，～で」と話し続け，主語と述語の関係が不明になり，長い一文で話そうとする。話と話の間は「エー」を繰り返す。自分の考えを「～です」「～と考えています」というまとめ方で表現できない。
- ⑦話し調が幼く「～しー，」「～でー，」と語尾が伸びたり，「すごく」「超（チョー）」と平気で話す。
- ⑧相手の目を見て話すことができず，下をうつむいたり，キョロキョロあたりを見回す学生がほとんどである。

教員として「話す」というパフォーマンスは重要なファクターであるが，それに対して指導する機会が学部教育の中に分散し，その能力を高める場面が有効に活用されていない。＜表5＞に示したように，筆者（川路，高旗）によってこれらのトレーニングを行うことによってその能力は飛躍的に伸びた。さらに述べるならば，既に講義，実習において蓄積されてきた経験と能力が体系的に表現できる方法を獲得することができ，それを他者に対してパフォーマンスできるようになったのである。

2 「教育実地研究Ⅲ」受講生の教員採用試験の結果

「教育実地研究Ⅲ」は2002年度42名の受講登録，24名の単位認定（18名の不可・未修），小学校教員採用試験合格者3名（島根県，大阪府，福岡市），幼稚園教諭採用試験合格者1名を出し，2003年度は46名の受講登録，26名の単位認定（20名の不可・未修），一次試験合格者のべ19名（複数の都道府県を受験している学生がいるため），二次試験合格者のべ16名（島根県小学校2名，島根県中学校1名，鳥取県小学校1名，東京都小学校1名，神奈川県小学校1名，川崎市小学校2名，大阪府小学校4名，兵庫県中学校1名，岡山県小学校1名，香川県小学校1名，福岡県小学校1名），実際の合格者総数11名という実績をあげる事ができた。またこれらの合格者に対しては「教育実地研究Ⅲ」終了後も二次試験直前まで個人面接，集団討論，模擬授業の3メニューを筆者（川路）の個人的なゼミという形で実施した。そのゼミ参加者も「教育実地研究Ⅲ」での履修者がほとんどであり，ここでの基礎的なトレーニングがなければ，このようなゼミも成立しなかったのではなかろうかと考える。

3 ワークシートの解説

「教育実地研究Ⅲ」におけるワークシートを末尾に掲載した。以下にその意図と使用方法を解説する。

教育実地研究Ⅲ 個人面接<初級> 質問シート

現在多くの都道府県の教員採用試験願書に自己アピールの欄があり、面接の際にその内容をさらに詳細に質問してくる場合がある。(島根県の場合は別紙としてA4で1枚)また、「教職志望の理由」「教育キーワード」についても基本的な質問事項である。基本的であるからこそ要領よくまとめて話すことが要求される質問であり、受験者が自分の考えをまとめる機会とする。

教育実地研究Ⅲ 個人面接<中級> 質問シート

このワークシートは、質問の細部について面接官がさらに質問していく面接(「つつこみ型」と呼ぶ)に対応したものである。学生同士でこの面接方式をすることによって、面接官が受験者に何を求めているか、どのように話せば分かりやすいか、さらに聞きたくなるような応答とはどのようなものであるかを考えさせることに有効である。また「いじめ・不登校問題」や「受験者の教職に対する構え」など<初級>の一段上の基本問題を問う。

教育実地研究Ⅲ 個人面接<上級> 質問シート

<初級><中級>で培った能力をさらに応用する形で、全国の教員採用試験面接問題の厳選12問をアトランダムに質問するものである。内容は「教育時事問題」「保護者への対応」「自己アピール」「ロールプレイング」についてである。またこれらの中から3問を10分以内に答えることで、自分の考えを話すことと時間の感覚を掴むことを目的としている。

教育実地研究Ⅲ 集団面接(集団討論を含む)練習問題

集団面接は近年多くの都市圏で実施される面接試験方法である。時間的にロスが少ないことと、複数の受験者を相対比較できる点で優れている。受験者としては順番を指定されるわけであるから、自分の考えを前の人に答えられる場合もある。あるいはいきなり答える順番が当たる場合もあり、そのような面接を体験したことのある学生は皆無である。個人面接の延長線上にある質問内容であるが、その答え方には工夫が必要である。前者と同意見の場合と異なる意見の場合、反対の場合などがあり得るが、そのためにも他者の答えを聞きながら、自分の考えをまとめるという作業が必要になる。

4 教職パフォーマンス能力の育成

先述したとおり、「教育実地研究Ⅲ」は、教員採用試験における面接試験(個人面接、集団面接、模擬授業等を含む)への対策として実施したプログラムである。しかし、ここには、単なる「試験対策」という意味合いを越えた内容が含まれている。それは、教職に就く、あるいは教職を遂行するにあたって最低限必要な「知識、見識」を培うことであり、またそれを聞き手に間違いなく伝える「プレゼンテーション・スキル」を磨くことにある。したがって「教育実地研究Ⅲ」における様々な演習は、教職への職業的(予期的)社会化であるとともに、教職の世界に特有の文化、価値規範等をひとつのフォーマットとして習得させることを目的とした。

「補足資料」の「個人面接<上級>質問シート」にもあるとおり、演習の題材を①近年の学

校教育をめぐる時事問題にかかわるもの、②具体的な授業場面、学級経営上の諸問題への対応にかかわるもの、③教職一般に対する自らの態度表明にかかわるものという3つに分類し、過去に実際に出題された設問をできるだけ多く用いた。もとより、これらの設問に対しては、「解答例」なり「解答のポイント」なりが民間の出版社による「試験対策マニュアル」として流通している。しかし、我々が今回重視したことは、こうしたマニュアルに則ることではない。すなわち、「パフォーマンス(プレゼンテーション・スキル)」によって示される解答者の「コンテンツ」をいかに磨くかが重要な課題であった。

端的に言えば、それは解答者の「知識量」と「論理性」を問うことに他ならない。単なる「主観の羅列」や「印象批評」あるいは「オーソライズされた言説の受け売り」を避けるために、我々が心がけたことは以下の4点である。

- 1) 知識量：設問に対する豊かな知識
- 2) 分析力：設問に対する様々な意見、立場を整理分類しうる力。
- 3) 複眼的思考：設問に対する多様な意見を相対化し、客観的に提示する力。
- 4) 判断力：1)～3)を基に、自らの立場を明示し、その根拠を説得的に提示する力。

演習を始めた当初、多くの学生が陥っていた解答の「パターン」は、「学生時代(小、中、高校時代の「思い出」あるいは教育実習時の体験)の個人的な経験」から話しを起こし、そのことをオーソライズされた言説(たとえば、「文部科学省がこう言っている」「新聞によると...」)で「補強」しながら、しかし結局は「個人的な印象批評」の域を出るものではなく、「教職をめざす者でなくとも言えること」を羅列することであった。これはすなわち、当該の設問に対する絶対的な知識量の不足を意味する。同時に、かろうじて抱えている知識ですら、他者とのコミュニケーションを通して相対化したり、疑問を抱いたりすることなく、教科書的に蓄えたものに過ぎないことを示している。

たとえば、「絶対評価と相対評価」のあり方に係る設問では、それぞれの評価法の原理や考え方を多角的に検証することなく、「トレンドとして、絶対評価が相対評価よりも良い」という「二項対立」で済ませてしまう傾向が多く見られた。これはすなわち、それぞれの評価法の原理に係る知識が皆無に等しいことを示しているに過ぎず、また教育評価に係るテクニカルタームが決定的に不足していることの証左に他ならない。

「パフォーマンス能力の育成」は、単に「プレゼンテーション・スキル」を磨くことによって達成されるのではなく、そこに盛り込まれるべき「コンテンツ」の問題であることが判る。むしろ、これらは両者の相互作用によって初めて可能となることである。したがって、通常の「座学」を中心とした講義の中で、いかに間違いのない知識の定着を図り、それを「演習」や「実習」等の場面において多角的な視点を持つように磨きうるかが重要である。その意味において、「講義」と「演習」「実習」等の往還をカリキュラム上で制度化し、4年間を通した「教員養成教育」のグランドデザインをもつことが不可欠と言えよう。

IV 「教職セミナー」について

1. 「教職セミナー」のねらいと企画

教育学部附属教育臨床総合研究センターまなび部門教官（廣兼・川路）は、平成15年度後期に「教職セミナー～教員に必要な対話の技術を探る～」と題した企画を立案・実施した。このセミナーのテーマは、「教職をめざすにあたって必要な『話し方・聞き方・対話の技術』について実習をまじえて研究する」ということであった。そのため、受講生達の技能が段階を追って少しずつ向上していくことをめざして、週1回の3回連続シリーズでセミナーを実施することとした。したがって、受講生は3回連続して参加できる者を優先的に参加させることとした。ただし、場合によっては1回のみまたは2回のみ参加も可とした。

2. 実施方法

実施日は平成15年11月26日(水), 12月3日(水), 12月10日(水)の3回で、実施時間はいずれも13:00から14:30までとした。実施場所は、第1回～第2回は教育学部附属教育臨床総合研究センター内授業分析室, 第3回は同センター内センター長室であった。受講生は、教育学部学生(2年生以上)を対象とした。

セミナーは、毎回受講生にテーマ・目標・課題を提示してスピーチの構想をたてさせ、当センター客員教授である中筋弘充先生(松江市教育委員会指導講師)・広江千年先生(鳥根県立松江教育センター所長)の両先生から受講生へ、各回のテーマや目標にそったアドバイスをしていただきながら、実際にスピーチや対話の練習をしていくという方法で実施された。

毎回のセミナー終了後には、担当者(廣兼・川路)と指導講師(中筋・広江)全員で検討会をもち、実施内容・受講生の課題到達度・次回の課題などについて検討をおこなった。

3. 「教職セミナー」のテーマ・目標・評価の観点

企画にあたっては、まず、「話す」技能と「聞く」技能が、モノローグからダイアログへと段階的に発展していけるようにテーマを設定した。また、話題として取り上げる内容については、受講生の教職に対する興味を引き出すため、学校教育に関わる時事問題を選んだ。第1回から第3回までのセミナーのテーマはそれぞれ以下の通りであった。

第1回「自己紹介をしよう～自己PRのコツを探る～」

第2回「教育時事問題について語ろう～事実を伝えること意見を述べること～」

第3回「教育時事問題について語ろう～対話を試みよう～」

また、これらのテーマの下で、具体的にどのような技能が育っていくべきかということについても検討し、第1回から第3回までのセミナーについて以下のような目標を設定した。

第1回

1. 大きな声で相手が聞き取りやすいように話すことができる
2. はっきりとした口調で話すことができる
3. 話す時の表情や姿勢に気を配ることができる

第2回

1. 自分が選んだトピックについて、内容を正確に伝えることができる
2. 自分が選んだトピックについて、わかりやすく相手に内容を伝えることができる
3. トピックに関する自分の意見を、説得力をもって相手に伝えることができる

第3回

1. 相手の意見を、正確に聞き取ることができる
2. 相手の意見を取り上げながら、新たな視点からの意見も加えて、対話をふくらませることができる

さらに、セミナー全体を通して特に「話し方」の技能について、評価の視点を以下の3段階に分けて設定・提示し、3回シリーズ終了時には第3段階まで進むことをめざした。これらの3つの段階は必ずしもセミナーの第1回から第3回までの実施回数に対応しているわけではなく、技能が高まっていく過程を示すために設定したものである。

- 第1段階 ・声の大きさは聞き取り易いか
- ・口調ははっきりしているか
 - ・話す時の表情はどうか
 - ・視線はどうか
 - ・話す時の姿勢はどうか
- 第2段階 ・聞き手を意識して話せるか
- ・順序よく話せるか
 - ・話の内容が伝わり易いか
- 第3段階 ・話の内容や運びに独自性があるか
- ・話し方に表現力があるか

4. 「教職セミナー」の活動内容と展開

セミナーは、各回とも「テーマの提示 課題の提示 試しの発表 客員教授からのアドバイス 構想の練り直し 再度発表 アドバイスとポイントの整理」という展開で実施された。

第1回から第3回までのセミナーの具体的な活動内容とその展開は以下の通りであった。

第1回

- ①ワークシートの記入：自己紹介で何を言ったらよいか考えるための手がかりを探る。
- ②試しのスピーチ：記入したワークシートをもとに、皆の前で1人ずつ1分間試しの自己紹介を試みる。
- ③客員教授からのアドバイス：受講生全体に対して、良かった点・さらに工夫してほしい点についてアドバイスをいただく。
- ④スピーチ案の練り直し：客員教授からいただいたアドバイスをもとに、1分間の試しのスピーチを2分間程度にふくらませる。
- ⑤2分間スピーチ：練り直したスピーチを、皆の前で1人ずつ2分間程度発表する。
- ⑥客員教授からのアドバイス：受講生全体、もしくは1人ひとりのスピーチに対してアドバイスをいただく。
- ⑦ふりかえり：今日の成果と課題などについてワークシートに記入する。
- ⑧次回の課題の提示：「教育時事問題について語ろう」というテーマで、新聞やニュースなどから、教育に関するトピックを1つ拾い上げ、「どんな事柄が報道されているか」を調べ、「その内容に対する自分の意見」を考えてくることを宿題として受講生全員に

提示した。

第2回

- ①トピックの整理と確認：ワークシートを用いて、試しのスピーチのためのトピックの整理と確認をする。
- ②試しのスピーチ：記入したワークシートをもとに、1人ずつ3分間程度で自分の興味のある教育時事問題を紹介し、それについての自分の意見を述べる。
- ③客員教授からのアドバイス：受講生全体に対して、良かった点・さらに工夫してほしい点についてアドバイスをいただく。
- ④スピーチ案の練り直し：客員教授からいただいたアドバイスをもとに、より説得力のあるスピーチになるように案を練り直す。
- ⑤再度スピーチ：練り直したスピーチを、皆の前で1人ずつ発表する。
- ⑥客員教授からのアドバイス：受講生全体、もしくは1人ひとりのスピーチに対してコメントをいただく。
- ⑦ふりかえり：今日の成果と課題などについてワークシートに記入する。
- ⑧次回の課題の提示：「教育時事問題について語ろう～対話してみよう～」をテーマに、山陰中央新報の論説記事「島根県の教育」と、島根県総合教育審議会答申「島根県教育の在り方」のうち「基本理念と基本目標」「施策の方向性」「本県の子どもの状況」のコピーを次回セミナーの資料として受講生全員に配布し、「資料に書かれている事柄に対する自分の意見」を考えてくることを宿題として提示した。

第3回

- ①意見の整理：配布資料についての自分の意見をワークシートにまとめる。
- ②グループで対話Ⅰ：「島根県の教育の在り方」というテーマについて、配布資料をもとに自分の意見を一人ずつ順番に発表する。（聞き手としての役割と話し手としての役割を意識しながらおこなう）
- ③グループで対話Ⅱ：対話Ⅰで聞いた他のメンバーの発表に対する自分の意見を一人ずつ順番に述べる。
- ④フリートーク：客員教授もまじえて全員で、話し合いをふくらませたり話題を転換させたりしながら、テーマに沿って討議する。
- ⑤客員教授からのアドバイス：各グループの話し合いの様子を聞いて、「相手の意見を取り上げながら話し合いを活性化させるためのポイント」についてアドバイスをいただく。
- ⑥ふりかえり：今日の成果と課題などについてワークシートに記入する。

5. ワークシートの作成にあたって

「教職セミナー」では、毎回ワークシートを作成し、各回の活動の展開に応じてどのように技能を向上させるかという過程が受講生の目に見えるように工夫した。ワークシートには、まず、自己評価の指標となるよう、各回とも特に「話し方」の技能と「話を構成する」技能に関する到達目標を明記し、意識づけを行った。そして受講生の思考活動を助けるように、活動の

展開に沿って、以下のようなワークシートの内容を構成した。

例えば、スピーチをする際にトピックを組み立てる手がかりとなるよう、キーセンテンスやキーワードを書き出す欄や、トピックの構成を書き出す欄などを設けた。これらは、第1回から第3回まで共通した内容である。

一方、回を重ねるごとに、目標の深まりに応じてトピックの組み立て方も深まっていけるように、ワークシートの構成を工夫した。第1回セミナーでは「話し方」の技能への意識づけに比重をおき、第2回および第3回セミナーでは「話を構成する」技能への意識づけに比重をおいた。具体的には以下の通りである。

第1回セミナーでは、トピックを順序よく組み立てる中で、如何に自分でなくてはできない自己紹介をするかということを考えさせるようにワークシートを構成した。第2回セミナーでは、「伝えたい事実」と「自分の意見」とを明確に区別し、話の全体像を見通した構成を考えさせるため、トピックに優先順位をつけさせるようにワークシートを構成した。第3回セミナーでは、自分の意見をまとめるだけでなく、「問題提起」「相手への賛同・同意」「相手の意見に対する反対・部分的な相違」など、対話をするにあたって自分と相手との立場を意識しながら話し方を考えることができるようにワークシートを構成した。

「聞く」技能の育成については、各回の目標に沿って各自のスピーチを客観的に評価できるよう、それぞれのスピーチに対する評価表を設けた。これによって、「聞く」立場に立ったときに、他者の発表をただ漫然と聞くのではなく、身につけたい技能を意識しながら話を聞くことができることをねらった。

6. 「教職セミナー」を実施してみた

募集の段階では20名を定員としていたが、応募したのは4名であった。実際には1回だけ風邪で1名欠席したが、あとの回は、4名全員が出席した。セミナー中の受講生達は、課題に非常に集中して取り組んでいた。少人数であったことの効果としては、限られた時間の中で受講生一人ひとりがじっくりと意見を述べることができ、また、聞く立場の者も、相手の意見に意識を集中して聞くことができたことがあげられる。

毎回の学習活動においては「試し」「アドバイス」「練り直し」「完成」といったプロセスを保障しなかったため、90分間で実施するにはやや盛りだくさんの内容となってしまったかもしれない。特に話の構成を考えるための時間はもう少しあるとよかったかもしれないが、受講生達にとっては90分間をフルに活用した密度の濃い時間となったと思われる。

第3回セミナー終了時に、受講生達に対して簡単なアンケート調査をおこなった。その内容は「参加の動機」「参加した感想(よかった点・改善してほしい点)」「今後もこのような企画があったら参加してみたいか」「他に教職に関するどんなセミナーがあったらいいと思うか」の5点について問うものであった。以下にそれらの質問に対する受講生達の回答を引用する。

Q1 「参加の動機」に対する回答

- ・「自己アピールや集団討論など、人前で自分の思いを伝えることが苦手なので、できるだけ回数をこなし、少しでも克服できればと思い参加した」
- ・「自己紹介・自己アピール・討論について練習をしたかったので」

- ・「人の前で話すことが苦手だったので、慣れたいと思ったので」
- ・「教職に関して、少しでも知識や情報がほしかったから」
- ・「教職に関する知識を増やしたかったから」
- ・「教員採用試験のことが分かるかもしれないと思ったから」

Q2「参加した感想」に対する回答

- ・「普段、自己紹介や自己アピールを時間をかけて行うことがないので、とてもためになりました」
- ・「人前で話すことが苦手で、あまり自信がないので、自己紹介や発表を通して練習できてよかったです」
- ・「話し方のコツや特徴をつかむことができたのがよかった」
- ・「話し方や話す内容のポイントを的確に理解することができた。その時間の中でも、自分自身が大きく成長していると実感することができた」
- ・「同じセミナーを受けている3人や、先生方の意見・考えを知り、教育・教職について、考えを深めていくことができた」
- ・「先生方と直にお話をすることができ、普段聞けないような話で大変ためになりました」

なお、Q3「改善してほしい点」については、特に回答がなかった。

Q4「今後もこのような企画があったら参加してみたいか」という質問に対しては、受講生全員が「はい」と回答した。

Q5「他に教職に関するどんなセミナーがあったらいいと思うか」に対する回答

- ・「現場の先生方やOBの先生方と討論したり、意見交換できる機会がたくさんあれば、積極的に参加したいと思います」
- ・「実際の現場の先生も招いて、話を聞いたり共に討論すること」
- ・「教育時事問題について学ぶセミナーなど、私たちは学校の日常の様子がなかなかよく分からないので、時々学校の先生の話の話を聞けたらいいと思います」
- ・「幼稚園に関するセミナーがあったらよいと言っている人がいます」

今回のセミナーで身につけさせたい技能は、教職に関わって求められるスピーチや討議に関わる「話す」及び「聞く」技能であった。それは授業や学級会や職員会議など様々な場面で応用できるための基礎的な技能である。受講生達の「参加の動機」からは、このような技能を高める訓練を必要と感じていることが見て取れる。今回のセミナーには、そのような訓練に対する意欲の高い学生達が集まったといえる。だからこそ、少人数であっても活発な、むしろ少人数であるからこそ一人ひとりが自分の意見を存分に語ることのできる濃密な学習活動が可能になったのではないと思われる。その結果、「話す」「聞く」技能については、上述の「話し方のコツや特徴をつかむことができたのがよかった」「話し方や話す内容のポイントを的確に理解することができた」といった感想にも表れているように、各受講生は客員教授からのアドバイスを的確に理解し、回ごとに設定されていた目標を十分に達成していたと評価できる。このような訓練を望んでいる学生達に対しては積極的に訓練の場を提供することが必要であり、また、そのような訓練を受けることで、学生達の力は確実に育っていくのだと感じられた。

一方、受講生達の「参加の動機」「参加の感想」「あったらいいと思うセミナー」についての記述からは、教職に関する知識や情報に対する関心の高さがうかがえる。そして、教育現場を取り巻く諸問題や教育の在り方に対する理想などを語り合える場が求められていることもわかった。教職を目指す学生達は、現職教員と話し合い、様々な情報を得たり意見交換をしたりできる機会を求めているのである。今回のセミナーでは、豊富な教職経験を持っておられる客員教授の先生方からご自分の経験談や意見や知恵などを盛り込んだアドバイスを直接いただくことができたので、受講生達の「教育現場の声を聞きたい」という希望にも応えることができたといえる。あるいは、今回のセミナーで、指導講師である客員教授の先生方に自分の意見を受け止めてもらえ、また、アドバイスももらえたという体験から、「もっと学校の先生と討論したり意見交換したりしたい」という気持ちがふくらんだともいえるかもしれない。したがって、豊富な教職経験を持つ先生方に指導講師として協力していただいたことは、この点においても効果があったと評価できる。

ところで、今回のセミナーの受講生は4名と少人数であった。このことは、先述した通り一人ひとりの主体的な取り組みを可能にし、濃密かつ活発な学習活動を生み出した。しかし、今回参加できなかった多数の学生達の中にもこのようなセミナーに参加したいと希望する者はいたかもしれない。もし今後もこのような企画を継続して実施するとすれば、活動の質を保ちながら参加の機会を拡げる方法についても、募集や開講の仕方などを含めて検討する余地があるう。

さいごに

2003年11月の島根県議会において興味ある質疑応答（末尾参照）が行われた。本研究で扱った「教育実地研究Ⅲ」教職セミナー」ともに「特訓」と呼ばれるものであるかもしれないが、それを否定的に捉えるのではなく、「教職パフォーマンス」として教員に必要な資質の向上という視点で筆者らは実施していることを確認しておきたい。まさに広沢教育長の言う「基本的資質、能力を有している者」を育てるために行っているのである。

教員採用試験が難関となった現在、教員養成学部として教員養成をどのように行うか、どのような教員を養成するか、さらにはどのように教員を供給していくかという問題に直面せざるをえない。本研究は第一に教員養成系学部として最初に再編統合された学部として今後教員養成に対する姿勢を教員採用という出口の問題から考え直すという目的と、第二にこれまで行ってきた様々な講義・イベントを記録するとともに学部内の各教官が共通認識をもつ機会にしたかったために行った。本研究を参照することによって現在の教員採用状況を概括できるとともに、参考資料を活用して自らのゼミ生に対し効率良く教職パフォーマンスを養うことを望んでいる。これまで蓄積してきたノウハウを公開するとともに、学部全体として今後の教員養成を考える機会としてもらえれば幸いである。最後に、客員教授の中筋先生・広江先生、そして学習意欲にあふれた受講生達の力によって、これらの講義、企画が一定の成果をあげることができた。筆者一同、この場をお借りして心からの感謝を申し上げたい。

注

- 1) 僻地校を多く抱える島根県において、小規模な中学校に全教科の担当教諭を配置することが困難なため一人の教諭が2教科以上の免許を取得していると好都合である。「複数免許」神話とは、教員採用試験受験者が複数教科の免許を取得していると採用に関して優遇されるという噂である。実際島根県では過去において教員採用試験受験資格に複数教科免許を取得していることが受験資格になっていた。また島根県教育委員会のホームページ上において「中学校については、採用候補者の選考にあたって複数教科の免許状(例：中学校音楽と中学校数学)を所有していることを考慮したいと考えています。」と記載されている。
- 2) 川路「学部教育と教員供給の関わりについての一考察 - 島根大学教育学部美術教育研究室の学生動向をもとに - (2001年『島根大学教育実践研究』第12号 pp 33 - 44 島根大学教育学部附属教育実践研究指導センター
- 3) 山崎 博敏「採用動向と教師の資質」p.16,『教員養成セミナー』1月号別冊『2005年度版教員試験攻略ガイド』時事通信社 2004年
- 4) 同上
- 5) マスコミ等で取り上げられる事件はもちろんのこと、筆者の耳に入ってくる卒業生からの情報といえば、「初任者研修の夏期研修の際に協調性を欠く高校教師の態度への不満」や、「やる気のない同僚教師の態度」等様々である。

執筆分担：Ⅲの4は高旗が、Ⅳは廣兼が、その他は川路が担当執筆した。

参考資料：

『教職課程』2月臨時増刊号「2005年度教員試験 最新県別情報&2004年度実施問題の徹底分析」協同出版株式会社2004年2月10日

島根大学教育学部卒業生 藤原千鶴の受験メモ

資料

<表1> 公立学校教員採用者数と競争率の推移

年度	総計	小学校		中学校		高校		特殊教育諸学校		養護教諭	
1975	-	17,777	2.3	9,631	7.1	6,401	5.9	-	-	-	-
1980	45,651	22,710	3.3	11,679	8.0	7,130	7.9	1,795	1.9	2,337	1.9
1985	38,239	11,386	5.2	13,485	5.1	10,363	4.6	1,548	2.2	1,457	2.2
1990	33,364	14,039	3.1	9,509	4.8	6,774	5.6	1,916	1.4	1,126	6.2
1995	18,407	6,742	6.2	5,414	8.8	4,232	8.7	1,213	3.1	806	8.4
1998	14,178	4,542	10.1	4,275	12.3	3,419	10.9	1,358	3.5	584	11.9
1999	11,787	3,844	12.0	3,110	15.9	3,181	11.9	1,175	4.1	477	14.2
2000	11,021	3,683	12.5	2,673	17.9	3,060	13.2	1,101	5.2	504	13.7
2001	12,606	5,017	9.3	2,790	16.0	3,223	13.4	1,076	5.5	500	13.9
2002	16,688	7,787	6.3	3,871	12.0	3,044	13.9	1,278	4.4	708	9.9
2003		9,137		4,108		2,954		-		-	

文部(科学)省「公立学校教員採用選考試験の実施状況について『教育委員会月報』1982年11月号 2002年12月号 2003年度は初任者研修参加者数(文部科学省調べ)をもとに山崎作成のものを引用

< 表 2 > 国立の教員養成系学部（教員養成課程）新規卒業者の教員就職者数の推移

卒業年	卒業者数	教員就職者数	教員就職率	うち正規採用	うち臨時採用
80年3月	18,900	14,500	77%	69%	8%
85年3月	19,500	12,700	65%	51%	14%
90年3月	19,200	11,100	58%	47%	11%
95年3月	16,100	7,600	48%	31%	17%
96年3月	15,990	7,091	44.3%	27%	18%
97年3月	16,569	6,764	40.8%	22%	17%
98年3月	16,124	5,614	34.8%	17%	18%
99年3月	15,831	5,071	32.0%	14%	18%
00年3月	15,041	5,070	33.7%	12.0%	21.7%
01年3月	14,606	5,516	37.8%	13.0%	24.7%
02年3月	13,184	5,935	45.0%	17.4%	27.6%
03年3月	実績 約11,270	約6,600	約59%		
04年3月	推計 約9,770	約7,000	約72%		

文部科学省教育大学室発表資料をもとに山崎作成のものを引用

< 表 3 > 平成16年度教員採用試験校種別合格者数

16年度教員採用試験 全県	校種別合格者数					平成15年11月10日現在	
県・市	小学校	中学校	高等学校	養護教諭	特殊教育	全校種計	
北海道	324	281	171	15	44	835	
札幌市	93	18		7	15	133	
青森県	40	80	34	6	18	178	
岩手県	99	80	95	4	16	294	
宮城県	116	88	91	15		310	
秋田県	31	30	63	3	12	139	
山形県	70	50	33	5	5	163	
福島県	110	88	61	12	26	297	
茨城県	108	157	95	21	53	434	
栃木県	144	132	55	7	32	370	
群馬県	99	163	97	15		374	
埼玉県	720	216	110	45		1091	
千葉県	513	201	20	42	46	822	
東京都	902	196	35	45	53	1231	
神奈川県	554	193	23	38		808	
横浜市	604	201		20		825	
川崎市	183	71	1	3		258	
新潟県	122	114	118	16		370	
富山県	96	58 = 中高		6	9	169	
石川県	79	87 = 中高		9		175	
福井県	151 = 小中高一括			4		155	
山梨県	59	32	49	8	25	173	
長野県	204	116	62	10		392	
岐阜県	115	104	94	7	29	349	

静岡県	260	140	116	31	65	612
愛知県	595	253	183	41	86	1158
名古屋市	85	80	60	7	25	257
三重県	103	89	64	18		274
滋賀県	121	30	21	13	29	214
京都府	187	50	34	10		281
京都市	161	32	11	8		212
大阪府	760	444	135	65	160	1564
大阪市	263	35	12	6	1	317
兵庫県	310	130	80	20		540
神戸市	82	25(中高)		5		112
奈良県	80	8	6		15	109
和歌山県	34	35	13	4	16	102
鳥取県	80	59	45	6	20	210
島根県	30	25	22	2	15	94
岡山県	160	120	60	25		365
広島県	146	34	26	7	2	215
山口県	71	41	42	8	8	170
徳島県	26	34	50	5		115
香川県	78	25	23	7	6	139
愛媛県	70	42	74	10	10	206
高知県	28	14	31	2	5	80
福岡県	200	41	23	12		276
福岡市	122	29	1	5	18	174
北九州市	50	28		3		81
佐賀県	40	35	27	2		104
長崎県	85	80	60	7	25	257
熊本県	89	72	86	14	7	268
大分県	40	34	37	2	11	124
宮崎県	120	56	72	7		255
鹿児島県	142	123	97	10		372
沖縄県	162	165	117	19		463
合計	10316	5164	2935	744	907	20066

県・市 小学校 中学校 高等学校 養護教諭 特殊教育 全校種計

(注)

宮城県 中高は中学に含む。 東京都 小中高共通, 中高共通は中学にまとめた。 京都府 社会人12人は高校に計上。 大阪府 小中は中学に含めた。 徳島県 中高10人は中学に含めた。 神戸市 ほかに幼稚園5人。 福岡県 高校家庭1人は福岡市に計上。 大分県 高校には特別選考7人を含む。 沖縄県 中高75人は中学に含む。

時事通信社内外教育研究会ホームページより

<表4> 平成15年度国立の教員養成大学・学部の卒業生の就職率のうち、
正式任用(臨時採用をのぞく)の就職率

教員就職率順

	小学校	中学校	高等学校	その他	合計	就職者全体	教員就職率
大阪教育大学	144	14	2	34	194	408	47.5%
横浜国立大学	53	4	1	8	66	142	46.5%
千葉大学	82	11		35	128	291	44.0%
東京学芸大学	178	22	12	47	259	591	43.8%
愛知教育大学	153	41	3	25	222	512	43.4%

広島大学	63	10		14	87	218	39.9%
静岡大学	48	11	3	13	75	189	39.7%
滋賀大学	33	7	1	12	53	134	39.6%
埼玉大学	71	3	2	25	101	258	39.1%
兵庫教育大学	48	2		14	64	168	38.1%
信州大学	40	17	1	11	69	187	36.9%
宮城教育大学	36	17	1	14	68	185	36.8%
北海道教育大	111	40	6	25	182	565	32.2%
愛媛大学	11	6	3	11	31	99	31.3%
岡山大学	18	11	2	21	52	169	30.8%
弘前大学	20	7	1	22	50	165	30.3%
鹿児島大学	26	16	3	7	52	172	30.2%
三重大学	6	6		15	27	90	30.0%
群馬大学	26	15	2	8	51	178	28.7%
山形大学	15	3		3	21	74	28.4%
京都教育大学	37	7	2	12	58	206	28.2%
上越教育大学	36	2		5	43	154	27.9%
岐阜大学	30	15	1	3	49	177	27.7%
奈良教育大学	22	3		7	32	117	27.4%
茨城大学	16	20	1	15	52	193	26.9%
福島大学	23	17		9	49	194	25.3%
新潟大学	18	15		6	39	159	24.5%
福井大学	6	8	2	7	23	94	24.5%
宇都宮大学	7	5	1	12	25	104	24.0%
秋田大学	9	1	1	5	16	69	23.2%
金沢大学	10	10	2	4	26	113	23.0%
長崎大学	16	5	2	7	30	137	21.9%
和歌山大学	16			2	18	83	21.7%
鳴門教育大学	14	5	2	8	29	135	21.5%
琉球大学	2	4		6	12	58	20.7%
宮崎大学	7	4	2	5	18	90	20.0%
福岡教育大学	34	6	1	16	57	310	18.4%
山口大学	2	1	2	8	13	77	16.9%
岩手大学	20	6	4	5	35	215	16.3%
佐賀大学	6			5	11	70	15.7%
山梨大学	4	1		6	11	77	14.3%
富山大学	5	1	1	4	11	81	13.6%
大分大学	4			7	11	81	13.6%
熊本大学	7	9	1	8	25	199	12.6%
高知大学	6	3		3	12	96	12.5%
香川大学	8	2	1	3	14	114	12.3%
島根大学	3	1		2	6	84	7.1%
鳥取大学	2				2	61	3.3%

時事通信社内外教育研究会ホームページより

<表5> 平成16年度島根県公立学校教員採用候補者選考試験結果
島根県教育委員会採用候補者名簿搭載者数

		受験者数(A)	名簿搭載者数(B)	倍率(A)÷(B)
小学校		416	30	13.9
中学校	国語	46	3	15.3
	社会	49	2	24.5
	数学	64	6	10.7
	理科	38	2	19.0
	英語	62	6	10.3
	音楽	37	1	37.0
	美術	23	1	23.0
	保健体育	43	2	21.5
	技術	10	1	10.0
	家庭	16	1	16.0
	計	388	25	15.5
高等学校	国語	41	1	41.0
	地理歴史	54	1	54.0
	数学	58	5	11.6
	物理	7	2	3.5
	化学	25	1	25.0
	英語	53	4	13.3
	保健体育	74	4	18.5
	家庭	24	1	24.0
	機械	9	1	9.0
	建築	9	1	9.0
	商業	26	1	26.0
	計	380	22	17.3
特殊教育諸学校		121	15	9.7
養護教諭		65	2	32.5
合計		1370	94	14.6

資料提供 島根県教育委員会義務教育課 (平成15年10月10日)

<表 6> 島根県教員採用試験合格者の推移

年度		小学校	中学校	高校	養護教諭	特殊諸学校	総計
2000	受験者	517	465	425	62	139	1608
	合格者	67(7.7)	66(7.0)	53(8.0)	5(12.4)	31(4.5)	221(7.3)
2001	受験者	481	382	474	57	117	1511
	合格者	30(16.0)	30(12.7)	4(11.6)	5(11.4)	16(7.3)	124(12.2)
2002	受験者	433	404	423	58	116	1434 ²⁾
	合格者	25(17.3)	25(16.2)	29(14.6)	3(19.3)	14(8.3)	96(14.9)
2003	受験者	391	369	419	60	116	1355
	合格者	25(15.6)	25(14.8)	19(22.1)	3(20)	12(9.7)	84(16.1)
2004	受験者	416	388	380	65	121	1370
	合格者	30(13.9)	25(15.5)	22(17.3)	2(32.5)	15(8.1)	94(14.6)

()内の数字は倍率(小数点第二位を四捨五入)

『教職課程』2月臨時増刊号より引用

<表 7> 2003年度「教育実地研究Ⅲ」シラバス

No.	月日	講義内容	講義の目的
1	4/14	1分間での自己紹介	人前で話すことの基礎的な能力を見るとともに、他者の自己紹介の内容や方法を
2	4/21	個人面接<初級>	受講生2?3名を一グループとし、お互いに基本的な質問事項について質疑応答を繰り返す。自分の考えをまとめ、話すことができるようになることを目的とする。また面接時の姿勢や話口調、癖の修正などを指導する。
3	4/28	個人面接<中級>	受講生2~3名を一グループとし、面接官役の学生が受験生役の学生の回答内容に対してさらに詳細に質問していく方法を体験する。自分の話す内容をより明確にするとともに他者の視点を
4	5/12	個人面接<上級>	過去質問された問題の中でも基本的な中から選択した質問に対して答える。
5	5/19	集団面接1	個人面接の延長線上にある集団面接であるが、回答する順番、他者の意見に対する対応を体験するなかから学ぶ。
6	5/26	集団面接2	同上
7	6/2	集団討論1	教育に関する新聞記事をもとに5分間の検討後、30分間の集団での討論を繰り返し実施する。討論に参加しない学生は、試験官役として学生の口調、態度、発言の妥当性、独自性、集団における立場等について評価する。
8	6/9	集団討論2	同上
9	6/16	集団討論3(川路参加)	学生間で行っていた集団討論に筆者(講師経験者役)が参加することにより、より試験を想定したものとした。
10	6/23	附属教育臨床総合研究センター 中筋弘充客員教授による講義	教員経験の豊富な客員教授に、実際の教育現場の抱える問題やそこで行われる教師の対応について講義していただいた。
11	6/30	模擬授業1	
12	7/7	集団面接3	集団面接1 2とメンバーを代え、繰り返し行う。

13	7/14	面接(個人と集団)	受講生の受験する都府県に合わせ、個人と集団に分け少人数トレーニングを行う。
----	------	-----------	---------------------------------------

講義に使用したワークシートは末尾に掲載

【補足資料】

<ワークシート1>

教育実地研究Ⅲ	個人面接<初級>	質問シート	学生番号<	>氏名<	>受験校種()
---------	----------	-------	-------	------	----------

<初級 A>

1. あなたの提出した自己アピールカードで一番伝えたかった内容についてお話しください。
2. あなたが教職を志望した理由を簡潔にお話しください。
3. あなたの考える「生きる力」を教えてください。
4. <小学校・特殊学校受験の場合> あなたは教師として子どもたちに何を伝えたいと思っていますか、教えてください。
5. <中学・高校受験の場合> あなたの受験教科()で生徒に何を伝えたいと思っていますか、教えてください。

<初級 B>

1. あなたの提出した自己アピールカードで一番伝えたかった内容についてお話しください。
2. あなたの考える「生きる力」を教えてください。
3. あなたは「学級崩壊」をどのように考えますか、お話しください。
4. あなたがもし「学級崩壊」の学級を担当することになった場合、あなたはどのような対応をしますか、お話しください。

<初級 C>

1. あなたの提出した自己アピールカードで一番伝えたかった内容についてお話しください。
2. あなたの受験校種(小学校～高校)の教師として必要な資質は何だと思えますか、お話しください。
3. あなたが教職に向いている理由をお話しください。
4. どうして鳥根県(他の都道府県の場合もあり得ます)を受験しましたか、その理由をお話しください。

<ワークシート2>

教育実地研究Ⅲ	個人面接<中級>	質問シート	学生番号<	>氏名<	>受験校種()
---------	----------	-------	-------	------	----------

<中級 A>

1. あなたの提出した自己アピールカードで一番伝えたかった内容についてお話しください。
(面接官役の人へ)以下の例を参考に、受験者の自己アピールで話した内容の中からキーワードを見つけ出し、それについてつっこんで質問をしてください。
(ボランティア)・・・そこで触れ合った人とうまくコミュニケーションを取るためにあなたは何をしましたか？ それはうまくいきましたか？ どういうところがうまくいったと思えますか？
(・・・といった子どもを育てたい)・・・「育てたい」という言葉をあなたはどのように考えていますか？それを育てるためにどのようなことがあなたにできますか？
(部活)・・・部活動の良さはなんですか？ 仲良くなれない仲間とどのようにおりあいをつけてつきあってきましたか？
(性格)・・・自分の性格()をそう感じるのはどのような場面においてですか？ 友だちはその性格()に対してどのように話してくれますか？

<中級 B>

2. あなたの提出した自己アピールカードで一番伝えたかった内容についてお話しください。
3. 不登校の子どもにどのような対応をとりますか、お話しください。
4. もしその原因がいじめだった場合、あなたはどうしますか、お話しください。
5. 一般的に不登校やいじめの原因をあなたは何だと思えますか、お話しください。

<中級 C>

6. あなたの提出した自己アピールカードで一番伝えたかった内容についてお話しください。
7. あなたは今の教育をどのようにしていきたいと考えますか、お話しください。
8. 今あなたが答えたことを実践するためにこれまでどのようなことをして自分自身を高めてきましたか、お話しください。

9. 今あなたが答えたことを実践するために教師はどのような研修を積むことが必要だと考えますか、お話しください。

<ワークシート3>

教育実地研究Ⅲ 個人面接<上級> 質問シート 学生番号< >氏名< >受験校種()

以下の問題は実際の面接試験の中で質問されたものです。チェックポイントに留意しながら、3問ずつお互いに質問しあってください。

- ①あなたが最近の教育に関する時事問題で特に興味関心を持っている事柄についてお話しください。(C P: 情報は新しいか、教育観が偏っていないか)
- ②学習内容3割削減についてあなたの意見を述べてください。(C P: 単なる批判になっていないか、削減のメリットは)
- ③保護者に対して信頼感を得るために必要な教師の資質についてお話しください。(C P: 子ども、教師、保護者のトライアングルについての認識は)
- ④「総合的な学習の時間」に関するあなたの考えを述べてください。(C P: 学習指導要領の範囲を超えた知識、情報、実践例が必要)
- ⑤教師に必要な資質を3つ挙げて、説明してください。(C P: 3つに何をとり上げるか、それをどのように説明するか、それを実感したのはどんな場面か)
- ⑥授業中に、児童・生徒が教師を出て行ってしまった。あなたはどうしますか?(C P: 学級崩壊や反抗的な児童生徒への対応は当然想定される質問)
- ⑦「子どもの目線で考える」という言葉があります。あなたはこれをどのように解釈しますか。(C P: 具体的な行為のみでなく、教師の心構えとしてあなたの教育方針を語ってください)
- ⑧()県があなたを不合格にして「しまったな。大きな損失だ」と思う部分はどこですか?(C P: あなたの自己PRを思う存分してください)
- ⑨指導要録の情報開示についてどのように考えますか?(C P: 公開に関するメリットとデメリットの認識)
- ⑩あなたの夢は何ですか?(C P: 教育に関するものとそうでないもの、準備しておくこと)
- ⑪あなたはなぜこの受験校種、受験教科にしたのですか?(C P: 対象となる児童生徒の実態と自分の希望の関連をおさえる)
- ⑫地域の方々は学校に何を求めていると思いますか?(C P: 地域とは何か?学校とはどのような立場のものかをおさえておくこと)

<ワークシート4>

教育実地研究Ⅲ 集団面接(集団討論を含む)練習問題(A)

1. 一分間で自己アピールをしてください。それでは右の方から順番に。
2. 教職の魅力は何ですか?それでは左の方から。
3. 「生きる力」について自分の考えを述べてください。右の方から

教育実地研究Ⅲ 集団面接(集団討論を含む)練習問題(B)

1. 一分間で自己アピールをしてください。それでは右の方から順番に。
2. これからの教師に必要な資質を何だと考えていますか?それでは左の方から。
3. みんなの中からキーワード< >をひとつ選んでそれについて自由に討論してください。

教育実地研究Ⅲ 集団面接(集団討論を含む)練習問題(C)

1. 一分間で自己アピールをしてください。それでは右の方から順番に。
2. では、一番右の方のいうキーワード< >とはどういう意味ですか?
3. 以下、各人に適当なキーワードを使って質問する。

<ワークシート5>

<第一回>教職セミナー ワークシート

今回の教職セミナーは参加者皆さんの教職パフォーマンスを高めるためのメニューです。

教職セミナーの目標(コミュニケーションの基本:自分のことを話し、相手の話を聞く)

第一段階・声の大きさは聞き取りやすいか

- ・はっきりとした口調で話せるか
- ・話す時の表情や姿勢はどうか

第二段階・聞き手を意識して話しているか

- ・話す内容の順序は適切か
 - ・話の内容はわかりやすいか，伝わりやすいか
- 第三段階・話の内容や口調に独自性があるか
- ・話し方に表現力があるか 【本日の目標は第一段階です】
- 【1】自己紹介をしてみよう。
- 何について話すか？ 自分を表すキーワードとは？
- ・自分の専門は
 - ・趣味や特技は
- <キーワードの構成>（時間を意識して）

自己紹介評価表（3項目は下記の1～5までの記号で評価しましょう）

1 = とてもよかった 2 = よかった 3 = まずまずのでき 4 = もう少し頑張ろう 5 = 抜本的な見直しが必要

氏名	声の大きさ	口調	表情・姿勢	コメント
自己評価				

<先生や友達から受けたアドバイスをメモしてみよう>

【2】オリジナルな自己アピールを考えよう。

改良点は？ 自分のオリジナリティーとは？ 相手に自分の何をアピールしようとしていますか？

自己アピールの構成

自己紹介評価表（3項目は下記の1～5までの記号で評価しましょう）

1 = とてもよかった 2 = よかった 3 = まずまずのでき 4 = もう少し頑張ろう 5 = 抜本的な見直しが必要

氏名	声の大きさ	口調	表情・姿勢	コメント
自己評価				

<先生や友達から受けたアドバイスをメモしてみよう>

<ワークシート6>

<第二回>教職セミナー ワークシート

『教育時事問題について語ろう～事実を伝えること，意見を述べること』

【本日の目標：第二段階】

- ・聞き手を意識して話しているか
- ・話す内容の順序は適切か
- ・話の内容はわかりやすいか，伝わりやすいか

【自己分析】 自分の話し方のクセを分析してみよう。

声の大きさ 話すスピード 話す内容について

【1】あなたが教育ニュースはどのような内容ですか？

ニュースのキーワード（ ✕ ✕ ✕ ）

ニュースソース（情報元）は？

ニュースの内容で伝えたいことをまとめてみよう。

< >

< >

< > の中に優先順位をつけてみよう。

そのニュースに対しての自分の考えをまとめてみよう。

< >

< >

< > の中に優先順位をつけてみよう。

相手にわかりやすく説明するポイントは？

自分の経験・体験談をいれることにより，具体性を持たせる。

複数の情報を組み合わせることにより，立体的な情報を組み立てる。

【2】スピーチを聞いてどんな情報を得ることができましたか？それについてどのような意見・考えを持ちましたか？

氏名	ニュースの内容	発表者の意見	自分の意見	発表の工夫

<先生や友達から受けたアドバイスをメモしてみよう>
【3】 2回目のスピーチはどのような点が改善されていきましたか？
 評価表（3項目は下記の1～5で評価しましょう）

氏名	改善された点	コメント	評価点

1 = とてもよかった 2 = よかった 3 = まずまずのでき 4 = もう少し頑張ろう 5 = 抜本的な見直しが必要
 <先生や友達から受けたアドバイスをメモしてみよう>

<ワークシート7>

<第三回> 教職セミナー ワークシート

『教育時事問題について語ろう～対話をしてみよう～』

【本日の目標：第三段階】

- ・話の内容や口調に独自性があるか
- ・話し方に表現力があるか

【1】 あなたが「島根の教育」を読んで印象に残ったキーワードは？

(✕ ✕ ✕)

キーワードについて具体的な方策や自分なりの考えをまとめてみよう。

(例) <基礎基本の定着> 基礎基本は日常的な学習活動の中でしか定着しないと考える。テストやドリルといった・・・。

< >

< >

【2】 友達の人の話のポイントをメモしてみよう。

【3】 対話の上手な方法は？

自分の主張・・・自分の意見を表現豊かにかつ明確に伝える。

問題提起・・・全員で共通に語り合える話題の提供。

相手への賛同・同意・・・具体的な事例をくわえ、意見を補強する。

一部分の相違・・・同意できる部分とできない部分をはっきりと伝える。

相手の意見に対する反対・・・相違点を明確に浮き出させるような言葉

<先生や友達から受けたアドバイスをメモしてみよう>

【4】 先生方を交えて対話をしてみよう。

自分の主張は？ 提起された問題は？ それに対する自分の意見は？

みんなとコミュニケーションできましたか？

<ワークシート8>

教員採用試験対策講座（面接）

<1> 自己紹介（1分） 5つの項目について他人を評価してください。 A...よい B...ふつう C...ダメ

氏 名 (カタカナ)	秒数(秒)	声の大きさ	話の明快さ	口調	表情・姿勢	コメント

誰を相手に、どのような場面で、どのような内容を、何をアピールするのか？

あなたのアピールポイントは何ですか？

自分の話すクセは何ですか？

<2> 面接の「型」

1. ドアのノック

2. 「失礼します」+入室のお辞儀

3. 「受験番号+氏名+よろしくお願ひします」+礼

4. 着席

- 5．着席時の姿勢（イスとおしりの位置，足の位置，手の置き場，背筋）
- 6．面接開始
- 7．質問に対する応答
- 8．面接終了
- 9．お辞儀
- 10．「ありがとうございました」+礼
- 11．「失礼しました，or 失礼します」+お辞儀
- 12．退室

< 3 > 質問に対する応答の「型」

結論を最初に話す。（「私は～と考えます。」「私は～です。」「それに対して～を行います。」等）

具体的な事例を交えて持論を強化する。

声の大きさは適度に。大きいと脅しているようにも感じられ，小さいと「これで教師ができるのか」と思われる。

応答は抑揚を工夫し，大事な部分については少し大きくゆっくりめに話すと相手に分かりやすい。

面接官は，短すぎる応答に対して「もう終わり，話す内容がないのかな」と考え，長すぎる応答に対して「自分の考えを相手にわかりやすく要領よくまとめる能力のない人」と判断する。（一つの質問に1～2分の間に答えられるように）

相手の目を（慣れない時は相手のネクタイの結び目を）見て話す。

自分の気持ちを表したり，具体性を高める身振りはOK。大げさな身振りは決して好感は持たれない。

若者の話すクセ（「エート」を繰り返す，「～で～，～し～，～な～，～を～・・・。」と語尾をのびし，文章が長くなる，主語述語の関係が分からなくなる等々）は自覚しないと直らない。子どもっぽい話口調は幼さを強調し，社会性の低さを感じさせる。

面接官に対していつも落ち着き，時には笑顔を出せる度胸が必要。（緊張しているのは受験生全員，そこで暗い顔をしていれば当然好感を持たれるはずありません）

どのような質問にも応用できるような見解「生きる力とは」「総合的な学習の時間について」「いじめ・不登校について」「学級崩壊について」「教育実習での体験」「ボランティア活動やアルバイト」「子どもとの楽しい触れあい」「趣味・特技について」等をまとめておくこと。

わかりやすい話の展開を工夫する。（「これについては私は3つの対策を取ります。第一に～」「これには～と～の2つがあります。～は・・・。」等）

メモ

（問）倉井議員（自）教員採用試験について

- 1．受験者は試験をパスするための特訓を受けていると聞かすが，所見を伺う。
- 2．現場体験が豊富な講師の優先採用枠を設ける考えはないか伺う。
- 3．（略）
- 4．（略）
- 5．本県の教員採用哲学を伺う。

（答）広沢教育長

- 1．次に，教員採用試験の対策についてであります。

近年，本県におきましては，少子化に伴う児童生徒数の減少により，採用者数も年々減少しておりますが，一方，毎年およそ千四百人の教員志望者が受験しており，非常に狭き門となっております。

議員お尋ねの「特訓」という形での，受験対策が行われている状況は把握しておりませんが，こうした多数の志望者が，各々に，本県の教員をめざして，様々な形で勉学に励んでいると聞いております。

採用試験は，受験対策によって記憶した，単なる知識や技術のみでなく，豊かな人間性や，高い倫理観，確かな指導力等を見極めるためのものであります。

このため，筆記試験におきましては，記述式の解答を求める問題を多く出題したり，実際の授業場面での指導方法を問うなど，指導力や判断力等，教員としての優れた資質の有無を見極めることができるよう，問題を工夫しているところであります。

また，面接試験においては，近年，より人物重視の選考を行うため，改善に努めてきたところであり，教員としてだけでなく，社会人として優れた資質を有しているかなど，多面的に評価を行うという趣旨で，PTA関係者や民間企業の方などにも，面接員をお願いし，第一次と第二次の両方の試験において面接試験を行ったり，

面接員の増員や面接時間を延長することなどにより、一人一人の受験者に対して、総合的な人物評価を行うよう努めているところであります。

2．次に、講師の優先採用についてであります。

今年度実施した選考試験による、来年度の採用候補者のうち、およそ七十七パーセントが講師経験者であり、近年、採用者の大部分は講師経験者であるという状況が続いております。

こうした中で、更に講師枠を設けることは、全体の採用人数が少なく、中学校や高校の教科によっては、採用予定者数が一人という教科も多い現状を考えると、新規学卒者等、講師経験のない受験者に与える影響は、極めて大きいものがあります。

また、地方公務員法等の法令上の視点からも、慎重に対応すべき事柄であると考えております。

一方では、講師による豊富な勤務経験が、採用後の指導に貴重な経験として生かされている状況があることから、こうした点も踏まえて、採用試験の在り方について、様々な視点から、研究していきたいと考えております

3．4は略

5．次に、教員採用哲学についてであります。

少子高齢化の進行、情報化や国際化の進展等、変化の激しい時代にあって、これからの時代を切り開く心豊かでたくましい児童生徒を育成するためには、教員自身が、単に、専門的知識のみでなく、豊かな人間性や、高い倫理観、確かな指導力等を備えていることが必要であります。

このため、教員として、特に、

一つには、児童生徒に対する教育的愛情、教育者としての使命感、教職への熱意を有していること、

二つには、さまざまな生活体験に裏打ちされた社会性や確かな実践力を備えていること、

三つには、家庭や地域、同僚等と十分な連携を図ることのできる協調性や、対人関係能力を備えていること、

特にこの三つが必要であると考えており、このような基本的資質、能力を有している者を、求めているところであります。

こうしたことから、より一層人物重視の選考を行うことが重要であります。選考試験の内容や方法に、更に改善を加えながら、児童生徒の教育を担う、優れた人材の確保に努めていきたいと考えております。

(平成15年11月島根県議会質問・答弁要旨平成15年12月3日(水)をホームページより引用)

http://www.pref.shimane.jp/section/kyousou/kengikai/H15_11/gikai1511.html